

# 「おもしろし」の世界

— 王朝文学における人工楽園の構想に関連して —

高 橋 文 二

\*

王朝の文学作品の中に見られる「おもしろし」の意義について以下概括的な私見を述べる。意図するものは国語学的な語彙の論ではなく、王朝文学世界の構造と触れあう「おもしろし」の世界の意義の私なりの解明である。解明とは言いながら、もとよりさように大仰なものではなく、単に一つの試論の呈示にとどまるものである。

例えば私は王朝文学世界の構造の基底にまず人間と自然との相互に引きあう力関係を想定する（ここで自然とは、景物あるいは現象としてのそれは言うに及ばず、心の内なる自然、つまり愛欲や憎悪や憧憬に揺れる情念の自発的傾向をも含む）。

人間と自然との肯定的な関係を、例えばもののはれの側面として把握する。また否定的な関係を、ものけ・ものまぎれの側面として把握する。いずれにせよ、そこには人間と自然との、揺動す

る、不定型の緊張関係が存在する。

ところが王朝の文学世界のうちには右の如き揺動的な緊張関係とは異質の、つまり、それらの混沌とした、ともすれば陥りがちな没自然的情况とは相反した、いかなれば王朝の人間であろうとする一つの証ともいふべき人工的世界構築の意志が存しているのである。

もののはれの側面において人はしばしば感傷の泥中に陥る。その時、知的な、人工的世界の洗練を通過させることによって、もののはれは単なる感傷ではない美的価値を帯びる。歌の贈答などといったこと、あるいは六条院の如き人工楽園の創設などといったことはその一つの表れにほかならない。

あるいは、ものけ・ものまぎれの側面において人は罪業のうち、愛執や怨念のうちに転落する。この不定型の、暗い世界への落ち込みに拮抗して、人工的世界が構築される。明るく典雅な六条院の、この世ならぬ結構はここでもまたその象徴的な表れであるといつてよい。

「おもしろし」という言葉の指し示す領域は、右の知的な人工楽園のありように響きあう。人工楽園は、しばしば「おもしろし」の評語をもって賛嘆されているが、それはただやみくもの賛嘆を語っているのではなく、右にいう不定型なものに対する人工的結構の世界の、この世ならぬ様への賛辞であり、時に驚愕をも含むものであったと考えられる。

ここで論じることは、「おもしろし」の語義的なものの周辺にすぎないが、射程は遠くこの人工楽園という小世界の、王朝文学の中における意味あいといったものにまで及んでゆきたい。

## 一

「おもしろし」という言葉についての評語として、例えば大野晋氏の『日本語の年輪』の一節（「きよし」の項）が思い出される。

「おもしろし」は、現在は、興味をひく意味に広く使うが、奈良時代、平安時代には美しい景色を形容する言葉だった。夜空を渡る月、檜ひの木の原などが、おもしろかった。「月のおもしろかりける夜」などと言ひ、河のほとりに、かきつばたがおもしろく咲き、滝が落ちているのもおもしろかった。天の岩戸から天照大神が姿を現わしたときも、人々は、「あはれ、あな、おもしろ」とはやし立てた。「おもしろ」は面白おもしろが原義で、目の前がパッと明るくなる感じをいっただのである。それで、月の白く照るのを、おもしろと言ひ、林をぬけて、眼前がパッと開けて明るい光がまぶ

しい時にもおもしろかった。滝が白く落下しているのも、かきつばたが咲いているのも、おもしろいと言えた。このように、「おもしろし」も一つの美しさの形容だったが、それが、心楽しい意味に移り、音楽の楽しみ、人々と遊ぶおもしろさと使うようになってきた。

一見、簡明な、しかし、きわめて示唆的な見解であり、首肯される点もまた多い。

だが、例えば、かぐや姫は「月のおもしろく出たるを見て、常よりも物思ひ」、いみじく泣いた。この時、月のおもしろく照るさまは心楽しませるものではなく、心悲しませるものとして作用している。確かに美しい景色に面しているのであろうが、心への転移は単に楽しいものとしてばかりではない。

あるいは、白く照るべき月は、周知の如く、しばしばあかきものとして把握される。そのことへの怪訝な思いは既にして『拾遺集』の雑下のうちに、

白妙の白き月をも紅の色をもなかあかしといふらむ  
などという形であった。

あるいは、上代の文献に見られるいくつかの例証（具体例は後に検討する）に当たってみる。右のいいぶりの中では触れられていない懐旧的な意味あいを帯びたものが多いのと同様に、単に美しい景色を愛でるといったものでは収まりにくいものがそこにはある。

一例として『日本霊異記』（既に延暦・弘仁期にかかるものではないが、上代の作品として考える）上巻第三十、「非理に他の物を

套ひ、悪行を為し、悪報を受けて、奇事を示す縁」（訓みは古典大系本による）の度南の国（黄泉）の描写の条をあげてみる。

路の中に大河あり。椅を度し、金を以て塗り蔽れり。其の椅より行きて彼方に至れば、甚だ懣き国有り。使人に問ひて曰はく「是は何の国ぞ」といふ。答ふらく「度南の国なり」といふ。

「懣き」国とは、黄泉の国であり、もちろん、単に心楽しませる対象ではない。また美しい景色であるとの世の美的範疇の規準で言いきってしまうには何か収まりにくいものが残る。ここには、やはり、何か別種の、より幅広い意味あいといったものが表されているように考えられる。結論に先立って一つの見通しをいえば、「おもしろし」とは、この世のほかの、つまりこの世ならぬ景觀や情況を語った言葉であり、それを始めて実見するものにあつては、今だかつてない体験の感懐を、一度、実見したものにあつては、もはや二度と触れ得ないであろう時間と空間への懐旧的な感懐を、語った言葉であると思われる。形容詞ク活用のありかたからしても、それは本来、客観的情況への傾きを示す言葉だったのであるが、右の如き心情面への転移をおのずと持つに至り、既に『万葉集』などにおいても懐旧的な意を持つものとして使われているのである。

先の『日本霊異記』の例証などは、文字通りの他界・異郷のありようへの評語なのであり、案外、始源的な意味をとどめているものなかもしれない。またそれがこの世ならぬさまを語る言葉だということとは、その言葉の構造を辿る過程において、この国の上代人た

ちの異郷意識のありようなどといった茫洋たる問題にまで時として思いを誘われることにもなる。

『竹取物語』には、三つの用例があるが、その一つは、くらもちの皇子の訪ずれたという蓬萊の山の描写に用いられている。

その山見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらを巡れば、世の中になき花の木どもたたり。黄金・銀・瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには色々の玉の橋渡せり。そのあたりに照りかかやく木どもたたり。その中に、このとりてまうできたりしは、いと悪かりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花ををりてまうできたるなり。山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、此枝ををりてしかば、さらに心もとなくて、舟に乗りて、追風吹きて、四百余日になむまうで来にし。（古典大系本——箇点筆者 以下同）

世にたとふべきかたなき蓬萊の山のさまが「おもしろし」の語をもつて形容される。その山のさまは度南の国を想起させる。いずれもこの世のほかの、他界とも異郷ともいふべき国のありさまへの評言なのである。

『竹取物語』における他の二つの用例は、歌の詠みさまと、既に先に掲げたものであるが、月の描写とに見られるものである。歌の詠みさまにそれが用いられるについては後に『伊勢物語』の初段の用例と関連して述べる。

月の描写に、しばしば、「おもしろし」が使われることは、例え

ば『古今集』（七例中五例）などを徴するまでもなく明らかなことであるが、その理由について深く問うたものを寡聞にして知らない。それが興味ある様だから「おもしろし」を用いるのだといった類の説明はもとより同義反復を出ない。

月を眺めながら懐旧に浸り、懐旧のうちに辛い思い出を浄化してゆくといった心の姿勢は古人にとつてごくありふれたことであり、とりわけ王朝の女流文学の世界の中で著しいことは先に触れたことでもあるが（「王朝女流文学に表れた月影の視点」——『国語と国文学』昭和五一・一〇）、その場合における照りかがやく月のさま、それによつて想起されるこの世ならぬ世界のさま、さらにはこれら二つの照応しあう世界をつなぐ時間軸ともいふべきもの、これらのものを包摂した世界の構造が、ほかならぬ「おもしろし」の意味構造と関連するのではないかと私は考える。

例えば上代の文献に表れた「おもしろし」の場のありようを検してみると次の如き情況が考えられる。

一つは、この世ならぬ眼前の世界を表現しつつ、単にその場の表現に止らず、過去の、記憶のうちのこの世ならぬ世界の想像的な復原を試みている場合、もう一つは、眼前のこの世のありようへの不満足から、過去の、記憶のうちのこの世ならぬ世界が過大に評価され、懐旧的に語られている場合、いずれの場合も単に眼前の場への賛嘆といったものではなく、現在と過去との相関的、重層的関係を包みこんだ上での感懐の表現として「おもしろし」が用いられているようである。このことは当然、月影のうちにもの思つた古人の心さまの構造にも関連するであろう。ともあれ、まずは上代における

その具体的な用例を検討することによつて右のありようを確認してゆくよりほかはない。

## 二

訓みに問題の存しない上代の用例をまず掲げてみる。

- (一) 山越えて海渡るとも於母之楼、今城のうちは忘らゆましじ  
 （『齊明記』）
- (二) 珠くしげ見諸戸山を行きしかば面白くして古へ思ほゆ  
 （『万葉集』——二二四〇）
- (三) 於毛思路、伎野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひば生ふるが  
 に （同——三四五二）
- (四) ……春さりて野辺をめぐれば面白み我を思へかさ野つ鳥来鳴  
 きかけらふ 秋さりて山辺を行けばなつかしと我を思へか天  
 雲も行きたなびける （同——三七九一）

この他に先に掲げた『日本霊異記』の用例（興福寺本の訓釈に「戀於毛之呂支」とあり）があるし、また『万葉集』巻四―七四六、生ける世に吾はいまだ見えず言絶えてかく何怜縫る袋は  
 の何怜、あるいは巻七一〇八一、

ぬば玉の夜渡る月を何怜わがをる袖に露そ置きにける  
 の何怜を、大方の注釈書はそれぞれおもしろく、おもしろみと訓んで  
 いる。前の歌の場合は文字通りこの世ならぬさまを呈する袋に対

する嘆賞の評語であり、後の歌の場合は題詞に「詠月」とある如く、月のありように連関する評語であり、ともども右の如く訓まれる妥当性は高い。

(一)の歌は『日本書紀』の齊明天皇四年十月の条に載せるもので、紀は、皇孫建王<sup>たけるみこ</sup>を失った天皇の、建王を「憶<sup>おもほ</sup>でて、愴<sup>いた</sup>爾<sup>た</sup>み、悲泣<sup>かなし</sup>びたま」うて詠んだ歌だと伝える。ここに用いられている「おもしろし」は、例えば橋守部の『稜威言別』が「今言ふおもしろき意にはあらず、馴<sup>な</sup>かしく、慕<sup>た</sup>はしき意なり」と記す如く、懐旧に関するそれであろう。『土佐日記』の帰京の際の周知の描写の一節に、

かくて、舟ひき上るに、渚の院といふ所を見つつゆく。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。

とあるが、この個所に用いられている「おもしろかりける」の意と同じものが右の「おもしろし」そのものうちにあったと解してよいと思われる。『土佐日記』の場合にも、昔の「おもしろかりける」ありさまを叙しているのだから、それは当然、懐旧の意を担っているはずである。

(二)の歌は、おもしろき情況が現在であって、過去ではないという意味で(一)の場合と異っているが、そこに懐旧の情が湧いているというありかたは(一)の歌と変らない。過去の記憶と現在の情況とが照応しあい、この世ならぬ、一種想像的な時空がいずれの場合にも現出しているといつてよい。

(三)の歌については、例えば古典大系本の頭注の口語訳(大意)、眺めのいい野を焼かないで下さい。古草に新草がまじって芽が出たら伸びるように。

などに代表される如く、眼前の眺望のよさへの感懐を述べたものと解されることが多いようであるが、右の大意にも明らか如く、三句以下の意が釈然としない。「おもしろき野」といった場合、勿論、眺望のよさは包摂されるわけではあるが、それだけでは歌の心をおさえることはできない。(一)、(二)の歌の場合と同様、何らかの形で懐旧がこの歌にも関っているのではないかと思われる。

この歌について創見を示したのは折口信夫氏(全集第一卷『古代研究(国文学篇)』所収の「古代民謡の研究」)である。氏は「おもしろし」の語にやはり懐旧を読み、大意として、

此ふる草の伸びの盛りに籠つたことのある野、其草かげには、はや新草の生ふべく見えてゐる。去年の如く、又、生ひ盛るべき草の野を、焼かうとする人がある。焼くことをやめてくれればよいに。

の如く解する。さらに種々の歌の例を引用しつつ、「野のふる草と言へば、其処にこもつた懐しい記憶あるべき男女を思ひ浮べ、新草を見れば、其伸び盛る筈の日に待ち心を抱く若い村人の俤がちらつく」といったその頃の人々の心のありように言及する。私も折口氏の驢尾に付して、この歌の「おもしろし」のうちに懐旧の意を汲みたいと思う。

(四)は九人の女子<sup>をとめ</sup>に偶々丘の上で行き逢うた竹取翁の、女人の擲掬に答えて詠んだ長歌の一節であるが、これもまた竹取翁自身の、若

く男ぶりのよかった過去の日への感懐を語ったものであり、この場の「おもしろし」もやはり懐旧の意を含んだものとして解し得る。下文に「なつかし」の語が用いられていることもこのことを傍証するであろう。

さらに、ここで「おもしろし」がなぜ用いられたのかということについて思いを及ぼしてみる必要がある。そのことは「おもしろし」の意味構造について示唆的な事情を明らかにすると思うからである。

翁が「おもしろし」の語をもって自らの過去を修飾すべく誘発されたのは、詞書に「慮はざるに偶神仙に逢へり」とある如く、眼前にこの世ならぬ九人の女子を見たことにある。頽落した老齡にある翁にとって「百嬌儔たぐひなく、花容止むことな」き女子の麗しさに抗すべき何ものもあるはずはない。翁は懐旧を語りつつ、想念のうちの「おもしろき」世界を開陳し、縷述することによって現実の無残さを超えようとする。女子の「おもしろき」世界に抗し得るものは、ただ想念のうちの、いうなれば想像力の行使によって確保された世界のうちの「おもしろさ」のほかはない。懐旧のうちに「おもしろさ」があることは勿論であるが、同時にその懐旧の世界を現出させるために想像力あるいは構想力への意志が自ずと働いていることも事実である。「おもしろき」世界の実現のために人の現身は如何にも心もとない。その時、人は人たることの証を立てるために想像力の世界を開陳する。「おもしろき」世界のかくの如き呈示とは、現実の無残さに対するきめて意志的な回復作業であるといえる。

(一)の歌にも、懐旧と同時に「おもしろき」世界の印象をこれから

も持続して維持してゆこうとする意志が働いている。(二)の歌にも、今の「おもしろさ」を、過去の想念のうちの「おもしろさ」と重ねあわせることによって、より確実な形で維持してゆこうとする意志が自ずと働いているといつてよい。(三)の歌には、さらに激しく、想念のうちの思いを大事にしたいという意志が働いている。総じてそれらは現実の空白に対する想像力による補填ともいふべきありかたを示している。例えば『日本霊異記』の用例の如き、文字通りこの世ならぬありようをそのまま呈示した「おもしろし」などは違って、意志と知性を介して実現された、一つの虚構世界・人工世界としての「おもしろき」世界が右の用例のうちには表れていると思われる。始めに人工的世界というものいいをした。そのことはいうまでもなく如上のありように連関する。

### 三

「おもしろし」の意を単に懐旧のうちに、あるいは単なるこの世ならぬさまのうちにとどめておく限り、それは語彙論の範囲を出ないであろう。もちろん、そういった用例もそこかしこに見出される。しかし、見落してはならぬことは右に述べてきた如き想像力・構想力に関する「おもしろし」のありようへの考察であり、それはつまり不定型の、揺動する外部の自然的世界との関連において「おもしろし」の世界を如何に位置づけるかという問題へと発展する。

王朝の文学作品に表れている「おもしろし」のありようを検してゆくと共にそこには上代の文献に存していたが如き懐旧的意味あい

は稀薄である。この世ならぬさまを呈することは上代の場合と同じであるが、想像力や知的な構想力の営為に関連した意味あいがあるに鮮明に表れているように考えられる。

先に述べた如く、例えば『竹取物語』におけるその三つの用例は、蓬萊の山の描写と月のありさまとかぐや姫の天皇に対する返歌のありように関して用いられていた。前の二つについては既に述べた。最後の返歌の場合は、

御返りさすがに憎からず聞え交し給ひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。

の如く用いられている。詩歌の詠みざまや内容に関して「おもしろし」がしばしば用いられるが、これもその一例である。歌を詠むという知的な行為のその詠みざまがこの世ならぬさまであったのである。

右の用例に関連して私は例えば『伊勢物語』（定家本）の初段の一節を思い浮かべる。

をとこの着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。そのをとこ、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られずとなむおいづぎていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人はかくいちはやきみやびをなむし

ける。

その場の情況に適った歌の詠みぶりへの「をとこ」自身からの判断、さらにはそう判断した「をとこ」への作者からの評言をも含めて「ついでおもしろきことともや思ひけむ」の一文は記されている。

「おもしろきこと」がそこに実現されており、それがつまりは「いちはやきみやび」の表出にもなるという関係がここにある。右の文に関する限り「おもしろきこと」は「をとこ」の心情の直接的表現ではなく、「をとこ」の思念の構想した小世界に対する「をとこ」自身からの認識の表現である。「をとこ」は歌と歌を詠みかける折の時宜を心得た作法を通してそこに「おもしろき」場を構想した。

そこに生み出された人工的な小世界を通して「をとこ」と、前文にある「女はらから」の世界とは通じあうのである。それがすみやかに成就されたことが「いちはやきみやび」なのであり、「みやび」である以上、そこに王朝の美意識が凝縮されていると考えてよいであろう。「おもしろき」世界のありようはここでは上代人ほどに直接的、詠嘆的ではないが、やはり想像力・構想力に関する形で表現されているといつてよい。「おもしろき」世界が、他界とか異郷とかへの思慕や、自己の体験に対する懐旧的心情によって構想されていた上代的世界のありようから徐々に知的な、人工的な小世界を意味するものへと変わりつつあるという事情がここに関与しているのだと思ふ。『遊仙窟』には「捺脚更風流」（真福寺本）とか「歴訪風流」（陽明本）などといった訓読の用例が見られるが、これなどもやはり「おもしろし」と風流との関連を示唆するものであろう。

あるいは、さらに古く『日本書紀』の継体天皇の七年九月の条の一節、

九月なつぎに、勾まがりの大兄おほえのみこ皇子みつ、親みつら春日かすがの日皇ひめみこ女むすめを聘むかへたまふ。是こゝに、月つきの夜よに清談もろかたりして、不覺おろかに天曉あけぬ。斐然ふみつくる之藻みやび、忽たちまちに言ことに形あらはる。

乃すなはち口唱くつでうたして曰いはく、……(訓なみは古典大系本による)

などが想起される。上代の例証ではあるが、既にして感動が「斐然之藻」を起こさせ、一つの確固とした言語表現を生み出していることが判る。「おもしろし」の語はないが、「月の夜に清談して、不覺に天曉けぬ」とは、まさに「おもしろし」の情況の謂いにほかならないであろう。「おもしろし」の世界は、ここでもまた「みやび」の世界と深く交錯しているといつてよい。

しかし、右のありようはいまだ感動と歌とのごく単純な結びつきにすぎず、初段の場合とは趣を異にする。歌が感動をただ表現するのみならず、さらに一層の感動を誘い出す、といった情況がまず考えられる。次には、まさに初段の如く、一層の感動の場をはじめから意図して、それにふさわしい歌の世界を構想する、といったありようが考えられる。

初段の前段階としては、例えば東下りの周知の一節などが思い浮かぶだろう。

その沢にかきつばたいとおもしろく、咲きたり。それを見て、あ  
る人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上かみにすゑて、旅  
の心をよめ、といひければ、よめる。

から衣きつつなれにし妻しあればはるるきぬる旅をしぞ思

ふ。

とよめりければ、皆人、乾飯かれいのうへに涙おとしてほとびにけり。

「おもしろく咲く」かきつばたのこの世ならぬさまがまず見る人々の心をうつ。その感動は単に主観的な詠嘆にとどまらず歌という知的な、客観的な形式に結晶する。人々の心はこの歌を介してさらに一層の感動に到達する。つまり歌は、ここで「おもしろく咲く」かきつばた以上に「おもしろき」場の、言語による創造であるといつてよい。しかも歌を介して人々の心は主観的なありようを超えて深く結びつく。

初段の場合は、この「おもしろき」場がさらに意図的に歌を介して創造されているのだといつてよい。歌はここで、この世ならぬ時空間の構想に与る、まことみやびやかな知的こゝろ小世界なのである。

歌のみならず舞や音楽の場に「おもしろし」がしばしば用いられるのも、つまりは右の如き知的な、この世ならぬ時空間の創造に關連するからなのだといは考える。

入りがたの日影かげ、さやかにさしたるに、楽がくの声まさり、物のお  
もしろきほどに、同じ舞の、あしぶみ・おももち、世に見えぬさ  
まなり。詠などし給へるは、これや仏の御おん迦陵かりやう嚩びんがの声なら  
む、と聞ゆ。おもしろくあはれなるに、帝みかど涙なみだを拭ぬぐひ給ふに、上かみ  
達部だちべ・皇子みこたちも、みな泣き給ひぬ。(古典大系本による)

『源氏物語』の「紅葉賀」の巻の冒頭に近い一節である。こうい



うありかたは二百二十例以上の「おもしろし」の用例をもつ『宇津保物語』（『源氏物語』は百五十例に満たない）においてはさらに著しい。

仲忠が尚侍、犬宮とともに琴を弹奏し、天の星を騒がせた「楼の上の下」の一節などがまず思い浮かぶ。

尚侍の殿、かの木のうつほに置き給うし、南風・波斯風をわれ弾き給ひ、細緒をいぬ宮、竜角を大将にたてまつり給ひて、曲の物ただ一つを、同じ声にて弾き給ふ、世に知らぬまで空に高く響く。よろづの鼓、楽の物の笛、他弾き物、一人して掻き合はせたるごとくして響きのぼる。おもしろきに、聞くと空に浮かむやうなり。星どもさわぎて、雷鳴らむずるやうにて閃めきさわぐ。△中略▽さまざまにおもしろき声々の、あはれなる音、同じ声にて、命延び、世の栄えを見給ふやうなり。

（角川文庫本下巻―349頁）

仲忠の吹く笛の音が「おもしろき折に合ひて、あはれにすごう、これも世になくきこゆ」などといった記述もすぐ後に続く。楽のおもしろさのこの世ならぬさまが何度となく語られてゆく。

暁方に近くなるころ、仲忠は祖父俊蔭の異郷での体験を記した詩を吟ずるが、そのさまもまた「おもしろうあはれなる」ものとして記される。しかもこの個所の異郷の記述は、

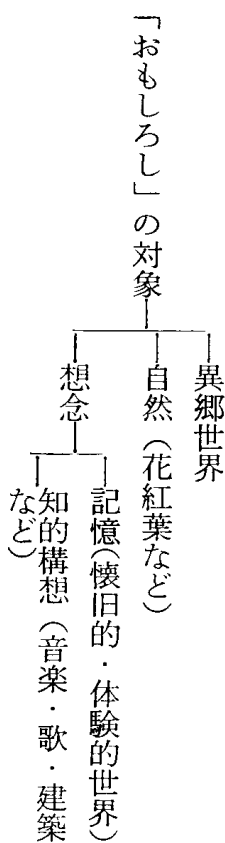
もろこしより、知らぬ国に到りて、おもしろき道を行き給ひけるに、いみじうあはれにおもしろき所々に、四季の花咲き乱

れ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したる物集りて……  
などであり、文字通りの異郷のさまの描写に「おもしろし」は使われているのである。楽の「おもしろさ」と異郷のそれとが共鳴しあって、この場のこの世ならぬさまをより立てているといつてよいであらう。

こういう例証をことごとく挙げてゆけば際限がない。ここに至ってひとまず「おもしろし」という語の意義についての私なりの整理を試みる。

「おもしろし」の対象は大きく三つに区分される。文字通りこの世ならぬさまを呈する異郷世界を対象とする場合、花紅葉など自然のこの世ならぬさまを対象とする場合、想念の世界を対象とする場合、の三つである。最後の想念の世界を対象とした場合は、さらに二つに区分し得る。その一つは、上代の用例を掲げた際に言及した懐旧や体験といった記憶面に関するものであり、もう一つは、歌や音楽や建築などの人工的世界の知的な構想に関するものである。いずれの場合も、卓越した、この世ならぬさまを呈するものとして、人の心のうちにきわめて美的な陶醉をもたらす。

以上のありようを図示すれば左記の如くなる。



もつともここで対象として異郷世界を考えているが、それもしば

しば想念の産物に他ならないという意味で、ある場合には想念の項の「知的構想」の世界と触れあうものを持つ。例えば王朝の文学作品の中にしばしば描かれている人工楽園としての建造物や庭園などを思い浮かべてみるとよい。人工楽園とは、つまりは異郷世界のこの世における創立である。この世ならぬ世界をこの世の中に構築することによって憧憬を成就せしめたものなのである。例えば幾度か「おもしろし」の語をもって形容される『宇津保物語』の京極殿のありさまを思い浮かべてみてよい（角川文庫本下巻―288頁―290頁）。あるいは『源氏物語』の乙女巻、胡蝶巻などに詳細に描かれている六条院のありさまを思い浮かべてもよい。そこにはそれらのこの世ならぬありさまが幾度となく「おもしろし」の語をもって語られるのを見出すことができるであろう。例えば六条院が「生ける仏の御国」（初音巻）とか「知らぬ国」（胡蝶巻）と言った言葉で表されていることは、それがまさにこの世における浄土であり、異郷であることを証していよう。

異郷はもはや単なる思慕や追懐の国ではなく、また、未開の心がその実在を信じた他界なのでもない。それは目のあたりこの世の唯中に現出している楽園なのである。『宇津保物語』においてはいまだ伝奇的な意味あいを脱却し得ていない楽園は、しかし、『源氏物語』においてはもはや単なる憧憬の園、伝奇の楽園ではなくなっている。紙幅の関係もあり、ここで詳らかに述べることはできないが、六条院は『源氏物語』の第一部・第二部が孕む暗い、不定型な世界に拮抗して構築された人工楽園なのである。光源氏を当主とし、女たちを常住させ、四季の彩りを欠かさぬこの世ならぬ人工楽園は、その

きらびやかな明るさのむこうにデイモニッシュな六条御息所の情念を覗かせ、野分の如き荒々しい自然の働きを垣間見せ、ほかならぬ当主光源氏自身の情念や柏木の妄執、すべてを呑み込む死の脅かしによってその土台骨を揺すられているのである。「おもしろき」世界のありようはこの時、不定型なものに対する人間的な証、暗く、デイモニッシュなものに対する自己救済の空間の意味を帯びてくる。例えば『栄花物語』の記す法成寺建立のありさま（巻第十七「おむがく」・巻第十八「たまのうてな」）などは右のありようをさらに象徴的に語っていよう。王朝末期の末世的な心情の潮の中で、人々の極楽浄土への願望といかに深く結びついてそのありさまが語られたかは右の箇所を一瞥すれば足りる。

最後に「おもしろし」の語と密接して人工楽園のありさまを語ったより典型的な例証として同じ『栄花物語』の巻第廿三「こまくらべの行幸」の冒頭から高陽院に関する記述を引用しておこう。

この世には冷泉院・京極殿などをぞ、人おもしろき所と思たるに、高陽院殿の有様、この世のことと見えず。海龍王の家などこそ四季は四方に見ゆれ、この殿はそれに劣らぬ様なり。例の人の家造りなどにも違ひたり。寢殿の北・南・西・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。東の対をやがて馬場のおとどにせさせ給ひて、その前に、北南さまに、馬場せさせ給へり。目も遙におもしろく、めでたき事、心も及ばず、まねび尽すべくもあらず。をかしうおもしろしなどはこれをいふべきなりけりと見ゆ。絵などよりはこれは見所ありおもしろし。

（古典大系本下―157頁）

その古い用例のうちに懐旧に関するこの世ならぬさまの意をとどめていた「おもしろし」は、王朝末期の作品のうちで、かくの如き人工楽園の、この世ならぬさまを形容するものとして幾度となく用いられている。異郷世界へのあくがれが、しばしばかくの如き人工性のうちにあったところに王朝文化の特質の一端があったといっている。

## \*

以上、「おもしろし」の意味構造について小見を述べた。紙幅があれば多くの例証にあたって検討すべきであったし、歌の評語として用いられる「おもしろし」（既に延喜十三年三月十三日の亭子院歌合の宇多院勅判に用いられている）についても言及したかったが、今は割愛する。参考のために、この稿を記すために参照した「おもしろし」に関する諸論文の名と著者名を掲げておく。評語としての「おもしろし」についての論は省略に従う。

- ・倉野憲司氏「おもしろし」(『文学』第四卷第十号 昭和一一・一一)

- ・向井寛氏「源氏物語に見ゆる『おもしろし』」(『国語国文』第七卷第二号 昭和一二・二)

- ・早坂禮吾氏「『おもしろし』と『めでたし』」(『国文学 解釈と鑑賞』 昭和二二・六)

- ・森岡常夫氏「源氏物語に於ける『おもしろし』」(東北大学国

文学会誌 昭二四・一)

- ・吉沢義則氏「『をかし』と『おもしろし』」(『源語釈泉』 昭和二五)

- ・吉沢義則氏「再び『おもしろし』と『をかし』」に就いて」

(『日本文学研究』第一九号 昭二六・一)

- ・大塚旦氏「平安朝文学における『おもしろし』—宇津保・源氏の用例を主に—」(『国語国文』第二六卷第九号 昭三一・九)

- ・伊原昭氏「おもしろし—源氏物語を主として—」(『色彩と文芸』 昭和四六)

- ・松尾聰氏「中古の作品における『おもしろし』—源氏物語を中心に—」(山岸徳平先生頌寿『中古文学論考』 昭和四七)

- ・山田肇徹氏「『土佐日記』における『おもしろし』『くるし』寸感」(『語文』第三七輯秋葉安太郎博士記念号 昭和四七・三)